
寮歌のエスノグラフィー

文化人類学研究室 4 年 園木貴宏

ミュージッキング 音響身体論 参与 関係性 記憶

要旨

本稿は、恵迪寮での寮歌文化を事例に、寮歌という文化から参与型音楽の参与と「いまーここ」性の諸相を分析する。まずはミュージッキング論と音響身体論についての過去の文献を参照して音楽人類学を体系的に概観する。そしてその中で大切になってくるものとして、「関係性」と「参与」、音楽の「いまーここ」性をあげる。恵迪寮の文化空間における寮歌は「参与」がカギとなり、そこだけの人とそこだけの関係性でそこだけの時間でそこだけの寮歌を歌うという「一度きりの音楽体験」が寮歌には存在している。あらゆる事例を通して寮歌に存在する瞬間的な「関係性」と「歌うこと」の重要性があぶりだされる。しかしその一方で事例の中には、もうひとつの「関係性」として瞬間的なものでなく継続的でコミュニティとしての「関係性」があることが示唆される。そのコミュニティとしての「関係性」から寮歌のもう一つの側面として「記憶」、「作品性」*、「芸術性」*、「再現性」についての議論を展開する。そしてそれらが複雑に絡み合い、「いまーここ」性ばかりでない寮歌の存在をみる。音楽人類学では、歌う人と聞く人が分裂して存在する西洋音楽的な価値観を分解してきた。音楽の歌としての「芸術性」ではなく、体性感覚や、歌う人や聞く人すべての関係者を含めた「いまーここ」だけの「歌うこと」の理論を築いてきたのである。しかしながら、「いまーここ」だけを見ているだけでは、この寮歌のもう一つの側面は容易に見逃しうるものではないかと論ずる。本稿では恵迪寮寮歌の諸相を通して、音楽人類学の「いまーここ」性だけでは見ることのできない音楽の世界の存在を示唆するのだ。

*本論において「作品性」「芸術性」「音楽性」というとき、それはその音楽の、楽譜やリズム、歌詞、曲調など普遍的な要素をさし、「関係性」の議論から導かれる音楽の可変性は排することとする。